
Another sense(アナザセンス)

invisiblehand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another アナザセンス
s e n s e

【Nコード】

N0949Q

【作者名】

i n v i s i b l e h a n d

【あらすじ】

アナザセンス。

それは本来常人が持つ五感に加え、「その他の感覚」第六感の事を言う。

主人公、ミヤジマアキラ宮嶋明はアナザセンス『電波感』の持ち主。彼にはパソコンや携帯から飛び交うメールを肉眼で見ることが出来る。つまり、電波が見え、またそれに触れる事も出来るのだ。

ある日アキラは学校の屋上で一通の謎のメールを手にする。それ

は未来を予知するもので、差出人は『サトミ』宛名には『マキ』と書いてあった。アキラはこの予知メールの事、そしてサトミ、マキという人物が気になっていた。やがて明らかになる二人の正体とは……。

アキラの前に現れた探偵、オムラカスヒコ小野村和彦に導かれ、彼ら四人の物語が交差する。

予知メール

それは幼い頃、手に取った一通のメールがきっかけだった。彼、ミヤジマアキラ宮嶋明にはパソコンや携帯から飛び交うメールを肉眼で見ることができない。つまり、電波が見え、またそれに触れる事も出来るのだ。当時それが当たり前だと思っていたアキラだったが、友人との会話の中でこれは他人には見えないものだということに気づく。自分はどこか他人とは違う力を持っている。このことを親や友人、先生にも言ってみたが誰も子供の戯言を信じることはなかった。アキラは自分に電波が見える事を証明しようとしたが、ある考えが頭を過ぎった。

『他の人には見えないメールを覗き見る事ができる……これは面白いのでは？』

アキラは自分の力で出来る事を考え巡らせた。人が送ったメールを捕まえて中を覗く事、またそのメールの文面を書きかえる事もできる。この瞬間、電波ジャッカー宮嶋明が誕生した。

アキラが高校へ進学して二年目の春、周囲の環境は一新される。一年目とは違うメンツで、その中でうまくやっていかなければならない。中にはおなじみの顔もあったが、アキラにとって再び人間関係を築き上げるのはわけもなかった。アキラには周囲の人間が送ったメールを覗き見ることが出来る。それだけでその人のキャラクタ―がつかめるし、誰とどのような関係なのか、どんな家系で家族は何人いるのか、恋人の有無まで知ることができる。そうやって世間をうまく立ち回ってきた。

ある日、アキラは屋上で一通の謎のメールを手にした。その内容は未来を予知するもので、時間と場所の約束が記されていた。学校の誰かに宛てられたものだろうか。差出人は『サトミ』宛名には『

マキ』と書いてあった。

「サトミにマキ？ 誰だろう……」

宛名の『マキ』のほうはこの学校の誰かだろうが、フルネームではないためアキラには特定できなかった。そのメールをリリースすると、本来届くべき所へ戻っていく。アキラはマキという人物が誰なのか気になった。

その日の午後の事、授業中に一人の女子が席から立ち上がった。

「どうしました？ 雛菊さん」

「先生、体調が悪いので早退します」

「またですか？」

皆が彼女に視線を向ける。アキラもまた彼女の後姿を見ていた。雛菊という名前をどこかで聞いたことがある。

「確か名前は雛菊……雛菊^{ヒナギク}真姫」

雛菊真姫といえは校内では誰もが一度は耳にした事がある名だ。頭脳明晰、容姿端麗、才色兼備だがサボリの常習犯のため総合成績は悪い。しかしテストでは文句なしでトップのため先生も何も言えず頭を抱えている、ある意味での問題児だ。アキラは噂に聞く彼女が同じクラスにいる事を初めて知った。名前こそ知らなかったが、確か上品で気のやさしい子だ。

「あの子が雛菊真姫だったか……マキ？」

同時に予知メールの宛名が『マキ』だった事を思い出す。

「あのメールは雛菊真姫に宛てられたメールか？」

そう直感したアキラは教室の時計に目を向けた。この学校からメールに記されていた場所へ行く時間を逆算すると丁度約束の時間になる。彼女を追えば謎の予知メールの正体が明らかになるかもしれない。

「先生！……」

アキラは彼女を追って早退した。

アキラが下駄箱を出ると、一人の男が待ち伏せていた。

「お前も彼女の行動が気になるのか？」

そこにいたのは中学の二年の頃同じクラスだった小野村和彦オノムラカスヒコだった。彼は探偵でアキラとは友人であり互いに様々な事を競い合ったライバルでもある。

「お前も？」

「サボリの常習犯の彼女がいったい何をしているのか気にならないか？」

カズヒコはそう言うのと彼女の後を追う。アキラもその後が続いた。

「彼女……何かあるのか？」

アキラはそう尋ねると、カズヒコは問い返した。

「お前は彼女がどこへ行くと思う？」

「……喫茶店『交茶』コウサ」

アキラは思わずメールの場所をつぶやいてしまった。カズヒコはその返答スピードとピンポイントさに少し驚いている。カズヒコは鋭い男だ。下手をすればアキラの能力を見抜きかねない。それが常識では考えられない力であっても。

アキラは話題を変えた。

「しかし、雛菊さんがあの容姿じゃオレ達ストーカーと間違えられるかもな」

「ふっ、お前はな……オレは探偵だ」

カズヒコは無駄に自信満々にそういつて見せた。

雛菊真姫を追って数分後、それは丁度メールの約束の時間。彼女はその場所にたどり着いた。

「当たったな……知っていたのか？」

カズヒコは尋ねた。さすがにメールを覗き見たとは言えないアキラはそれを否定する。アキラ自身、メールの宛てられた人物が雛菊真姫だった事に驚きをおくせなかった。アキラとカズヒコは茂みに隠れてマキを見張る。数分後、その喫茶店に現れたのは別の学

校の女子高生だった。彼女の名前は白羽里見^{シラハサトミ}。

この子が予知メールを送った人物だろうか。

「あの子と待ち合わせしてたみたいだな……ホントにただのサボリか？」

マキとサトミは喫茶店でお茶とお菓子を食べている。

「オレの勘が外れたかな？ 事件の二オイがしたんだが」

カズヒコはそう言うとその場を離れようとした。

「あと十分……待ってみよう」

アキラは予知メールの内容を知っている。メールの内容はこうだ。

『四時二十五分、桜夜北交差点で事故。対象、小学生三人を保護する。』

もしこの予知が正しければ十分後に何か事故が起きるはずだ。

しかしその事はカズヒコにはまだ言えない。アキラは真実を確かめようとしていた。

「おい、アキラ見る！ 動き出したぞ」

残り時間五分にさしかかった時、マキとサトミは動き出した。

辺りを見回している。その時アキラの前を三人の小学生が横切った。ちょうど下校時刻のようだ。マキとサトミも、その小学生たちに気がついたのか歩み寄ってきた。

「そののボクたち？ 喫茶店でアメ玉もらったんだけどいらない？」

おねいちゃんたちおなかいっぱい」

サトミが小学生たちを引き止めたその時。

『ドン！』

近くでもものすごい音がした。交通事故が起きたのだ。車が歩道に乗り上げ、電信柱に突っ込んでいた。あのまま小学生を引き止めていなければ、小学生三人とも巻き添えを食らっていただろう。

アキラとカズヒコは目を丸くして顔を見合わせた。アキラは腕時計を確認する。サトミのメールの予知通り、時計の針は四時二十五分を指していた。

事故現場に人だかりができはじめると、マキとサトミはその中に姿を消した。

「あの二人、まるであの場所で事故が起こるのを知っていたようだな」

そう言うとカズヒコは茂みから立ち上がった。

「どこへ行く？」

「アキラ、二人を追うぞ。事件の二オイだ」

カズヒコは目の前の事故には目もくれず二人を追い始めた。探偵の血が騒いでいるのか、嬉しそうにしている。アキラもまた予知メールの事が気になっていた。

マキとサトミは早々とその場を離れていく。その人ゴミの中で、マキは誰かの視線を感じ取っていた。

「マキ……気がついていてもかもしれないけど、私たち誰かにつけられている」

サトミもまた、アキラとカズヒコの存在に気がついていていた。

「私たちの事がバレている？」

「わからないけど、どこかで撒く必要があるわね……追っ手を分散しましょう」

「わかった。後でメールするね」

マキとサトミはその場で解散し、別の方向へと歩き出した。

「アキラは雛菊の方を頼む」

「おいちよっと！……マジか？」

カズヒコはサトミを、アキラはマキを尾行した。

尾行

カズヒコがサトミを尾行し始めて数分後、三日市駅にたどりついた。階段を駆け上り、鞆から定期券を取り出し改札を抜ける。周りに同じ制服を着た高校生が数人見られた。その中に入ってしまえば、サトミもまぎれもなく普通の女子高生だ。カズヒコは切符売り場の前で立ち止まった。

「定期か……どこまで行くんだ？ とりあえず終点まで買っとくか」
少ないお金をはたきながらもカズヒコは電車に乗るサトミの尾行を続けた。まもなくして特急電車が到着する。サトミはそれに乗り、カズヒコはサトミに気づかれぬように少し間隔を空けて乗車した。次の駅到着までの十分間、特別変わった事もなく電車は甘倉街道駅へ到着する。サトミに降りる気配はない。

「ここで降りないとなると、残り二駅のどちらかで下車する筈だ」
カズヒコの監視の中、出発のベルが鳴り扉が閉まりかけたその時。サトミはそのドアの隙間を縫って電車を降りた。ワンテンポ遅れてカズヒコも電車を降りようとしたが、間に合わない。

「まさか……尾行が気づかれていた？」
ゆっくりと走り出す電車の中からサトミの姿を確認しようとするカズヒコ。そこには、すべてをみすかしていたかのような視線でカズヒコを見るサトミの姿があった。

「オレとした事が……一杯くわされたな」
そう言いながらもカズヒコは笑みを浮かべていた。電車は次の駅まで十五分は止まらない。

その一方で、マキの尾行を任されたアキラは気が付けばひと気のない林の中を歩いていた。

「雛菊さん……こんな林の中へ入って何処へ向かっているんだろう」
日も少しづつ沈みかけ、時計の針は午後六時三十分を回っている。

林の中はなおさら暗く、女子一人がうるつくにはあまりにも危なっかしい状況だ。アキラも後ろめたい気持ちでいっぱいだった。

しかし、マキはアキラの尾行に気がついていていた。また、アキラはそれに気づいていなかった。そんな中アキラは、一通のメールがマキの方へ飛んでいくのを確認した。すかさずそのメールを捕まえる。それはもはや条件反射となっていた。サトミからマキへのメールだ。『ただ今帰宅。ストーカーの男はなんとか撒いたけどそっちはどう？』

メールを開いたアキラはもちろん引つかかっていた。『ストーカーの男』は然る事ながら、それよりも『そっちは』の方に。

「……撒いたストーカーはカズヒコのことか？ ……そっちはってのは？」

アキラは察知した。このストーキングもとい尾行がばれている事に。同時に血の気が引くアキラだった。メールに気をとられてマキを見失ってしまったのだ。辺りを見回してみたが視界には入らない。しかし周囲にかすかに見える電波の霧がどよめいているのが感じられた。普段とは違う。その直後アキラは背後にただならぬ気配を感じた。

「だれだ!？」

とっさに距離を置き振り返るアキラ。そこには長い黒髪を後ろに束ね、凜とした表情でアキラをにらみつける美しい女性の姿があった。そしてさらにその後ろ、なんとも異様な空気の塊がみえる。その部分だけ電波の霧が練り抜かれて真空になっているようだ。右手には青白く鈍く光る刀のようなものを持っている。アキラは本能的に身の危険を察知した。

「殺される!」

アキラは腰を抜かし動けないでいた。流れる雲の隙間、夕暮れの光に照らされて、その姿が少しずつに鮮明になる。

「私に何か用かしら？ さっきからずっと付けて来るようだけど」
その正体は雛菊真姫だった。いや、アキラからしてみれば雛菊真

姫の姿をした別の何かに見えていた。マキはあとずさるアキラに一歩ずつ近づく。その時アキラの右手にはサトミからマキへのメールが握られていた。機転を利かせそのメールを手放すアキラ。それと同時にマキの携帯電話の着信音が鳴った。緊張の糸が切れたかのように拍子抜けするマキは、おもむろに携帯電話を取り出した。それはもちろんサトミからのメールだ。

『ただ今帰宅。ストーカーの男はなんとか撒いたけど彼ら、何か重要な事知ってる。殺さないで』

そのメールはすでに一度アキラの手に渡ったものだ。とっさの事だったが上手くメールの改竄に成功したようだ。最後の『殺さないで』はまさにその時のアキラの心境と言えるだろう。メールに目を通したマキは、刀のようなものを収め、束ねていた髪をふりほどいた。その瞬間、いつもの雛菊真姫が帰ってきたかのように思えた。マキはほどこいたヒモを首に回しながら言った。

「あなた達いったい誰なの？　どこの高校？」

アキラは最初この質問が冗談だと思っていたが、どうやらマキは本気らしい。よりもよって同じ高校の、同じクラスの人間に対してこの質問はタブーとしか言いようがない。クラス替えがあったのは最近の事だが、アキラはショックを隠せなかった。マキは制服のネクタイを締め直している。どうやら髪を束ねていたヒモはネクタイだったらしい。その下にちらと光る十字架のネックレスが印象に残った。アキラの考えるの雛菊真姫の特徴に『才色兼備』という欄に新しく、『変人』・『人じゃないかも』という言葉が付け加えられた瞬間だった。

「あなた何か重要な事知ってるみたいね？」

「……」

「まあいいわ。今日は遅いし、もう帰りましょう。近いうちにじっくり話を聞く必要があるから、連絡先教えといて」

アキラとマキは携帯電話の連絡先を交換した。

「えっと……ミヤジマアキラ？　でいいんだよね。じゃあ来週にで

も……まさか、逃げたりしないよね？」

マキはそう言っただけでその場から去っていった。アキラのフルネームを知ってなお、同じクラスである事にも気づかなかつた。その場に一人のこされたアキラはふと我に返る。

「……来週じゃなくても明日学校で会うだろうに」

木々の隙間を生暖かい風が吹き抜けている。それはアキラが高校二年に上がった春の出来事だつた。

非日常

翌日、白羽サトミはめずらしく目覚めのいい朝をむかえることができた。セツトした目覚ましが鳴る前の起床。いつも見ていた悪い夢に起こされる事もなく二度寝する必要もなかった。

しかし、この『悪夢』こそが白羽サトミの持つ他人にはない能力、『予知夢』だ。そしてその予知の内容は、サトミの近辺で起こる事故。その力は、サトミが夢から目覚めたちょうど十二時間後の予知、すなわち時計の針は同じ所を指す。サトミは予知夢から目覚めるといつもその時間と夢の内容を紙にメモするようにクセをつけていた。今日はその紙が真っ白だ。

「今日は白紙……久しぶりの休みね」

休みといっても平日、学校が休みというわけではない。サトミが普通の女子高生として今日を迎えられるというだけだ。

しかし、サトミにとってはそれだけで清々しい気持ちだった。

「ここ数日間事件続きで、マキにはずっと付き合ってもらってたからね……今日は休みだってメールしとこう」

紅茶を入れながらトーストを焼く。香ばしい匂いが食欲をそそる。

「あらサトミ、おはよう。今日はゴキゲンね」

「おはよう、おかあさん」

「そういえば昨日男の人が玄関前に立ってたけどお友達？」

「え？……どんな人だった？」

「学ランだったから高校生でしょ？サトミのお友達と思ったけど……」

「ああ、それでゴキゲンなんだ？彼氏？」

「……」

サトミはいやな予感がしていた。同じ高校でさえもサトミの家を知っている男はいない。昨日撒いたストーリーカーの男が頭を過った。

『あの後、何度も後ろを気にしていたが、確かに尾行はなかった……』さわやかな朝は一変してサトミは不安になった。この件に関して、

もう一度マキに会って話す必要があるかもしれない。

「行ってきます」

サトミは鞆を肩にかけ、玄関を出る。

「行ってらっしゃい……白羽サトミさん」

「　　なんで」

玄関を出てすぐ横、そこには昨日撒いたはずのストーカー、小野村和彦の姿があった。

「何のようですか？　昨日から……」

サトミは玄関横に立つカズヒコをにらむように言った。

「そんなに怒らないでくださいよ……昨日は見事に一杯食わされました」

「何が目的？」

「もちろん、あなた達が持っている『他人には無い能力』についてです。」

「他人には無い……能力？」

「　　では今日の放課後、昨日の喫茶店で詳しい話を、……これはマキさんにも関係のある話です」

そう言つとカズヒコはその場から立ち去ろうとする。

「待てストーカー男！」

「ストーカー男じゃなくて、小野村和彦……探偵です」

「探偵？」

「急いでますんで、また後ほど」

サトミはあつけにとられて物も言えなかった。サトミの平和だったはずの一日が、カズヒコの一言でひっくり返されてしまった。

「はあ……マキに連絡しなきゃ」

一方アキラは、いつもどおり通学はしていたが、昨日の事があつたからかあまり気分がすくないでいる。これから雛菊真姫と顔を合わせると思うと気が引ける。アキラは教室の前まで来るとドアに隠れてマキの姿を探した。室内を一通り見回してみたが、そこにマ

キの姿はない。

「まだ……来てないみたいだな」

ほっとしたアキラは教室に入ろうとする。

「……どうしたんですか？ドアの前で」

後ろからとてもやさしい女性の声でした。

「あ、すみません」

アキラが振り向いた時、その場の空気が凍りついた。やさしい声の主は雛菊真姫だった。アキラとマキは互いに血の気が引くのを感じた。二人とも声が出ない。しかしショックが大きかったのはマキの方だった。昨日のあのヒドイ目に合わせた男がなぜか目の前にいる。まさか同じ高校の、しかも同じクラスだったということに動揺を隠せないでいた。それもそうだろう。校内では上品でかよいい女の子を演じていたのだから。

「え……と」

マキはその場の空気に耐えきれず逃げ出した。

表裏

「ちよつとマキさん？」

アキラはマキを追うが、すぐに見失ってしまう。まもなく学校のチャイムが鳴ると、アキラはとりあえず自分の教室に戻ることにした。そこにマキの姿はないまま、HRがはじまった。

「あれ？ 雛菊さん、今日は休み？」

「遅刻じゃないの？ それかサボリ……」

「でもさつき下駄箱のときまで一緒だったんだけど……いないね」
クラスの女子達が会話している。アキラはその会話に割って入った。

「雛菊さんってどんな人？」

突然だったが、自然な形で会話に入れてくれた。

「宮嶋君だよな？ 私達はマキと中学の頃からの付き合いだけど……ここまでサボリ癖は酷くなかったよ」

女子の一人がそう言った。

「マキさん頭いいし、美人だから結構人気あったんだけど、なんか一線引いてるような……少し距離を置いてたような気がするな」

「そうそう……なんか本性隠してるカンジするよね」

彼女達が言っている本性とは、昨日アキラが見てしまった『雛菊真姫の姿をした何か』のことだろうか。アキラは授業中、何度も昨日の出来事を思い出していた。気になるのはマキがあの時見せた変化である。日常の彼女からは考えられない異様な雰囲気と、どこから出してどこへしまったのかわからない青白く光る刀。いつもの彼女に戻ったと感じた時にはもうそれは無かった。

「殺さないで！」

アキラは叫び立ち上がった。クラスの皆が何事かとアキラの方に振り向く。昨日の事を考えすぎて、夢を見てしまったようだ。

「宮嶋……誰かに殺される夢でも見たか？」

先生がそう言うのと生徒達の笑い声がクスクス聞こえた。皆がアキラの方を見て笑っている。その中にいつ戻ってきたのか、雛菊真姫の姿があった。アキラを見て笑っているが、心の底から笑っている。どうかは怪しい。

「すみません」

着席するアキラ。

数分後、授業が終わるとマキに話かけようと席を立った。マキはさっきの女子達と話している。

「雛菊さん、ちょっといいですか？」

「……あら宮嶋君、さっきは誰に殺されかけたの？」

マキは満面の作り笑いで答えた。

「ここで話しても？」

「うーん……ダメ」

「すみません、ちょっとマキさん借りていきます」

啞然とする女子達の中、アキラはマキの腕を掴んで、教室から出て行く。

「ちょ、ちょっと離して！」

アキラの手を振り解こうとするマキ。

しかし、アキラの腕力は強く、半ば強引に屋上へ連れ出された。

ここまでくると、抵抗するそぶりさえ見せなかった。

「ここなら誰も聞いてないだろう」

「……宮嶋君、あなたどこまで知ってるの？ それともう一人男は誰？」

マキは尋ねた。

「昨日の事故の一件……本当はあの小学生三人は巻き込まれるはずだった……？」

「なぜそう思うの？」

アキラがそう確信したのは言うまでも無く、サトミからマキへの予知メールの文面からだ。

しかし、アキラはまだマキへの予知メールを覗き見した事は伏せておいた。

「昨日事故が起こる前に、マキさん達は動き出した。その結果、ほんの些細なきっかけで小学生三人の命を救った……まるでそこで事故が起こるのを知っていたかのように」

「あなた達は、私とサトミが動く事を知った上で見張っていたとでも？」

マキはアキラの後ろに立って問い返す。アキラは屋上の柵に手を掛けた。

「もう一人の男、彼の名は小野村和彦。高校生であり、探偵もしている。あいつとは中学以来の付き合いでね」

「探偵……なるほどね。私達のこれまでの動きは知られていたの？」
正直な所、アキラ自身なぜ小野村和彦が雛菊真姫をマークしていたのか知らなかった。それどころか、昨日話したのはかなり久しぶりの事だった。アキラの中で忘れかけていたもう一つの謎、小野村和彦の存在を思い出した。

「……それについては、オレからは何とも」

マキは深くため息をつく。

「何でもいいけど、これから学校では気安く声をかけないで。あと、私達の邪魔はしないでよね」

扉が閉まる音がした。アキラが振り返ると、そこにはすでにマキの姿はなかった。屋上に一人残されたアキラに、まだ少し冷たい風が吹き付ける。

「いや……あれが本性か」

アキラは一人つぶやき、屋上から空を眺めた。

召集

マキは教室に戻ると、平常心を装って次の授業の準備を始めた。先ほどまで一緒に話していた女子達はマキが帰ってきた事に気づいたのか、コソコソ話している。そのうちの一人がマキに話しかけてきた。

「ねえマキ。宮嶋君なんだったの？ まさか……告白されたとか？」
「まさか……」

一瞬マキは考えた。このまま『告白』を否定してしまえば、次に来る質問は何だろうか。好奇心旺盛な彼女達は、そのままマキを詮索して話すまで帰してはくれないだろう。そこで真実を話すわけにもいかない。もしそうなった時、どうやってごまかすのが簡単か。答えは出ていた。それは『告白』を否定しないことだった。

「実はね……」
「うそ！？ ホントに？」

周囲が勝手に盛り上がるのを感じ取るマキだった。否定した所で、最終的には『告白された』と嘘を言っていただろう。マキの頭の回転の良さが幸いし、真実を詮索される事はないだろう。

「でも……妙ね」
マキはその言葉にドキツとしたが、あくまで平常心を装う。
「ん、何が？」

「だってマキだよ？ 今までだって何度も告白されてきたのに、今さらこの恥じらいは……」

マキは息を呑んだ。自分の演技がわざとらしすぎたのか、『告白』が嘘だということがばれたら、告白なんかよりもっと重要な事を隠していることがバレてしまう。世の中には目敏い人間がいるものだ。

「マキ、あなた……宮嶋君のこと好きなんじゃないの？」

一瞬空気が凍りついたが、その言葉を聞いてほっとするマキ。自

分の中でひどくツツコミを入れていた。『ついさつき同じ学校の、同じクラスだと知った人間のことを?』

「返事どうするの?」

「まだわかんない」

『告白』の嘘をやみくもにしているうちに、次の授業のチャイムが鳴る。同時にマキの携帯のバイブレーション音がなった。机の死角で携帯電話を取り出すマキに、再びサトミからのメールが届いていた。メールの内容は今日の放課後、再びあの喫茶店に集合する事だった。その内容からいつもの予知メールとは別件であることを察する。

「なんだろう……今日のは予知夢とは違うみたいだけど」

サトミに返信メールを打とうとするマキ。

「雛菊さん、授業中ですよ」

「あ、すみません」

数学の先生から注意され携帯をしまった。教科書を机に出しながらふとアキラの事が気になったマキは、本人にバレないようにチラとその席に視線を向ける。うかつにも目が合ってしまった。マキを見るアキラの視線は酷く冷めていた。

放課後、帰りの準備を整え席を立とうとするアキラの前に、マキが腕を組んで立っていた。

「あなた、まさか帰るつもりじゃないでしょうね?」

「オレは部活にも委員会にも入ってないし、残る理由なんかないからな……ってゆうか気安く声をかけないんじゃないのか?」

少し考えてマキは口を開いた。

「……私からはいいのよ」

「はあ? (なんて自分勝手な女だ)」

「そんな事より、昨日の喫茶店覚えてるでしょ? 今日の放課後あの場所に集合。サトミがあなたも呼んでって」

「今日の放課後って……今から?」

「ええ、どうせヒマなんでしょ？ それじゃあ私先に行ってるから」
「え？ あ、ああ」
マキは一足さきに昨日の喫茶店へ向かった。

「なんだよアキラ！ いつのまに雛菊とそんな仲になったんだ？」

友人のシュウがアキラの肩に手を置きながら言った。シュウはアキラと一年の時から同じクラスだった男だ。思えばアキラがマキの噂を初めて耳にしたのもシュウからだっただ。

「お前……一年の時は雛菊の話しても興味なさそうな顔してたくせに！ ……返事はどうだったんだよ？」

「返事？ なんだよそれ」

「告白したんだろ？」

「はあ？ 誰がそんな事を？」

「女子が言ってた……雛菊本人から聞いたって」

「なんだって!？」

アキラは鞆を抱えて教室を飛び出し、喫茶店へ急いだ。

交差

この町と隣町をつなぐ交差点、一角にその喫茶店はある。店の広い窓から見える風景は、普段ならば穏やかなものだ。

しかし、今日は昨日あった事故の影響でバリケードができており、その情景を壊している。マキとサトミは時折この場所で待ち合わせをし、これまでもいくつかの事件や事故を未然に防いできた。この町にある桜夜学園高校に通うマキと、隣町の甘倉高校に通うサトミにとってはこの喫茶店に集まるのがお互いに便利な場所となっている。

「でも、まさかこの店の前で事故が起こるなんてね」

サトミは一足先に、喫茶店で紅茶を飲みながらマキ達が来るのを待っていた。昨日と同じ席から事故の有様を見ていたサトミの目に、遠くから走ってくるマキの姿が映る。しばらくすると店の戸が開き、ベルの音がした。

「ごめんサトミ、待った？」

息を切らしながらマキが店内に入ってきた。

「いや、考えごとしてたからそうでもなかったよ。……それより昨日のストーカーはマキの学校の生徒だった？」

「ええ、しかもそのうちの一人は私と同じクラスだった」

「ふふっ、そういうところマキらしいよね。普通気づくでしょ？」

サトミは笑いを堪えるように言った。

「ところでサトミ、今日はどっいった用件で？」

マキはメニュー表を手に取り眺めながら言った。サトミは飲みかけのティーカップをソーサーに置く。

「その事なんだけど、今日は私もここへ呼ばれたの」

「え、誰から？」

「昨日撒いたと思っていたストーカー、実は今朝家の前にいてね」

「怖いね……信用できるの？」

「わからないけど、今日はそれを確かめようと思ってね。……それに私達の力を知っている」

「まさか」

マキとサトミがそんなやりとりをしているうちに再び店の戸が開く音がした。

「おい、雛菊マキ！」

そう言っただけで喫茶店に入ってきたのは宮嶋アキラだった。マキとサトミはどうしたものかとアキラの方へ視線を向ける。

「ちょっと、そんな大きな声出さないで」

マキは小声で、それでいて聞こえるようにアキラに言った。席に着こうとするアキラをじっと目で追うサトミ。

「はじめましてストーカーさん。私はマキの友人の白羽サトミです」

「あ、どうも宮嶋アキラです。」

互いに自己紹介をするアキラとサトミ。サトミという名を初めてを耳にしたアキラにとって、彼女が予知メールを送信した本人であることを改めて確信した瞬間だった。

「それにしても、ここへ呼び出した張本人が遅刻だなんて信じられないわ」

懐中時計を眺めながらサトミは冷めてしまった残りの紅茶を飲み干した。

「張本人って……小野村カズヒコの事ですか？」

アキラはサトミに尋ねた。

「ええ、宮嶋君は彼のお友達かなにか？」

「はい、中学の時からのお友達……というよりはライバルでした。」

「ライバル？」

マキとサトミは声を揃えて言った。

「そうです。とはいってもケイドロの……なんですけど」

アキラは少し照れながらそう言う。『ケイドロ』とは鬼ごっここの一種で、逃げる側の泥棒と追う側の警察とで分かれて、チームを組んでグループで遊ぶ一種のレクレーションだ。アキラの通う中学で

は定期的にケイドロをして遊ぶという伝統があった。

「小野村カズヒコがオレの通う中学に転校してきたのは、確か中2の時」

その頃の事を思い出すアキラ。

宮嶋アキラ、当時十三歳。中学2年生。

「今日はこれからみんなと一緒に勉強していく転校生を紹介します。入っておいで」

アキラの担任の先生が教室の扉の方にむかつて手招きをした。扉が開くと、新品の学ランを荒々しく着こなした男が立っていた。アキラはその外見から、とんでもない不良が来たものだと思った。

「小野村和彦です。探偵をやっています」

その見た目とは裏腹に丁寧なあいさつをやってみせた。

探偵和彦

「マジかよ……探偵?!」

クラスの一人が声を上げた。

「では小野村君、席はあの隅……宮嶋アキラ君の前の席を使ってください」

アキラの座っている席の前に小野村カズヒコが来る。

「おや……いい匂いがしますね」

カズヒコはアキラの方を見て言った。アキラは今朝食べた一晩寝かせたカレーの事を思いだす。

「ああ、カレー好きなのか?」

「……?ああ、カレーは好きだよ」

これがアキラとカズヒコが交わした最初の言葉だった。転校生というものは来たその数日間はチャホヤされるものだ。ある日の昼休み、カズヒコの机の周りに男女問わず人ばかりができていた。

「小野村、お前ホントにすごいな!なくしたと思ってた自転車の鍵見つけてくれるなんて」

「小野村君、昨日私の傘なくなっちゃったんだけど……」

「俺はシャーペンなくしちゃってさ」

数日も経てばカズヒコの探偵としての才能はすでに皆に認められていた。

「これなら今度のケイドロが楽しみだな」

クラスの一人が突然そう言った。後ろで聞き耳を立てていたアキラが少し反応する。カズヒコもその言葉に反応を示した。

「ケイドロ?」

「ああ、転校してきたばかりの小野村は知らないかもしれないけど、この学校ではクラスで定期的にケイドロをやる伝統があるんだ。しかも今では本格的に警察側はトランシーバーを使ってるんだぜ」

「へえ…それは面白そうだな」

「ただ、このクラスには泥棒側のエースがいるんだ……」

そう言っただけアキラの方に視線を向ける。その視線に釣られてカズヒコもアキラの方を見た。

「その逃亡ぶりとは鮮やかな泥棒救出劇に俺たちはヤツをこう呼んでいる……怪盗アキラ！」

実は当時、アキラはこのケイドロにおいて伝説的な記録を作りだしていた。それは一度も捕まることなく、捕まってしまった見方の泥棒を最後には全員開放するというものだった。それができたのはこのケイドロの特徴でもあるトランシーバーがあつたからだ。電波を操るアキラにとって、トランシーバーは敵の行動を思いのままに操る事ができる有効アイテムだ。警察同士の情報のやり取りをジャックし、その会話を攪乱させる。その受容端末としてアキラは常にヘッドホンを首にかけていた。

「ふふっ……もしカズヒコが警察側に就いた所で、オレを捕まえる事は出来ないさ」

アキラは鼻で笑って自信満々にそう言った。

「そうか……それは宣戦布告というやつだな」

カズヒコの探偵としての血が騒いだ。この二人のやりとりを聞いていたクラスの連中が、異様なまでの盛り上がりを見せる。

「怪盗アキラVS探偵カズヒコだ!!!」

この噂はたちまち他のクラスにも伝わっていく。

そして戦いの幕は切って落とされた。警察側を任されたカズヒコチーム8人と、泥棒側のアキラチーム8人。勝敗は警察が捕まえた泥棒の数で決まる。時間内に最低でも半数以上、または全員を捕まえれば警察チームの勝ち。それに満たない場合は泥棒チームが勝つ。時間は昼休み終了のチャイムが鳴るまで。メンバーの全員にルールの確認がとられた。

「では警察側の人はトランシーバーを取りに来てください」

審判の学級委員がトランシーバーの入ったダンボールを持ってき

た。警察側全員にトランシーバーが渡ると、最初の3分は泥棒側に逃走時間が与えられる。その間、警察側のカズヒコ達は牢屋となる校庭の前で作戦会議をしていた。

「それではリーダーのカズヒコ君、今日は君が警察側の指揮を執ってください」

審判の学級委員は言った。

「わかりました。では警察の皆さん、これまでのケイドロの内容がどうだったのか簡単に話してください」

カズヒコは皆に尋ねた。そこで分かった事は、これまでのケイドロはアキラによって逆転されたゲームが殆どだったという事だ。

「過半数を捕まえた所で、全員を牢屋の見張りにつけては？」

「それもやるうとしたが、過半数を捕まえた所でトランシーバーに呼びかけても応答がないんだ。電波障害？ かなんかで、結局集まらない」

その話を参考にカズヒコは警察側の皆にある策を与えた。

「なるほど、そういうことか。注意すべきは宮嶋アキラただ一人だな……」

カズヒコは腕時計に目を向けた。まもなく3分が経過する。

「時間だ。作戦通り牢屋に見張りを一人残し、あとは追跡する」

カズヒコの指示で警察が散った。

「あれ？ カズヒコは行かないのか？」

牢屋の見張り役が言った。

「……しばらく様子を見る」

カズヒコは校庭のベンチに腰を掛けた。

ケイドロ

ゲームスタートから10分、追跡した警察チームから無線で泥棒を1人捕まえたと連絡があった。そのまま牢屋につれて来るように指示を出すカズヒコ。

「あと7人……」

カズヒコがつぶやく。

「7人つてまさか全員捕まえる気じゃ……」

見張り役は言った。

「アキラは捕まった泥棒を全員解放させるんだ……ならオレは逃げる泥棒を全員捕まえるまでさ」

カズヒコはニヤリと笑うと、ベンチから立ち上がる。

「オレも現場に行く。見張りは任せた」

ついにカズヒコが動いた。ゆっくりと歩いていくが、その足取りに迷いは感じられない。その光景はまるで何かの後をたどるように。そう、小野村カズヒコは軌跡感の持ち主。警察犬よりも嗅覚が鋭く、人や物が通ったニオイの軌跡を見ることが出来る。つまりカズヒコにとってこのケイドロは、泥棒に糸をつけて泳がせているようなものだった。あとはこの糸を手繰り寄せれば、行き着く先に獲物はいる。

「なるほど、ここから階段を上ったか……」

しばらくすると無線からカズヒコの声が飛ぶ。追跡する警察にそれぞれ指示を出しているようだ。その指適切な判断と指示により次々と泥棒は捕まり牢屋に入る。見張り役はその光景を目の当たりにし、驚きを隠せなかった。残り時間15分、牢屋の中は7人。これまでこんなに早く捕まえられた事があつただろうか。

しかしその中にアキラの姿はなかった。残りの一人は当然アキラだ。そんな中、見張り役はふと不審に思った。それは捕まった7人の泥棒の中に、カズヒコが捕まえてきた泥棒が一人もいなかったか

らだ。

「あくまでアキラを追っているということか」

間もなくカズヒコから次の指示出された。

「追跡班全員に通達、残り一人、アキラを捕獲する。北門へ向かえ！」

一方、泥棒側のアキラは残るところただ一人。得意の電波ジャックでヘッドフォンから状況のすべてを聞いていた。そのおかげで、警察側の動きも手に取るようにわかる。

「おいおい、北門つて言ったらまさにここじゃないか。オレの居場所が見えているのか？」

アキラは辺りを見回してみるが、カズヒコの姿は見えない。

「それにこんなに早く7人も捕まえるとは、小野村カズヒコ……何者だ？」

このままでは泥棒の過半数以上が捕まったままで、アキラチームは負けてしまう。勝つには、チャイムが鳴るまでに救出に向かわなければならぬ。アキラはなんとか救出する方法を考えていた。

「……全員を牢屋の見張りにつける気配もないな」

アキラはヘッドフォンを外した。戦いの時が迫っている。その時誰かが近づいてくる気配を感じた。

そこには小野村カズヒコの姿があった。お互いの距離約10メートル。互いに睨み合ってそこから動かない。カズヒコも迂闊に手を出せないのには訳があった。それはアキラが今いる場所が塀の上だからだ。カズヒコから見て塀の向こうへと逃げられたら、迂回しなければならぬ。

「よくこの場所がわかったな、カズヒコ」

「ああ、オレに追えないモノはない」

そう言いながらカズヒコは腕時計をチラと見た。ケイドロ終了のチャイムが鳴るまであと4分。もうそろそろ召集をかけた追跡班が来てもいいころなのだ。

「なにを待っている？」

「アキラ、お前の負けだ。どんなに急いでも扉の向こうからでは牢屋へ行くまで5分はかかる。かと言ってこっちに降りればオレがお前を捕まえる。それに、追跡班全員に召集をかけた。包囲されているハズだ」

カズヒコの言葉にアキラは声を上げて笑った。

「包囲されているハズ？ 変な事言うんだな。その追跡班はどこにも見当たらないが？」

カズヒコは辺りを見渡してみるが、アキラの言うとおり誰も見当たらない。その直後カズヒコのトランシーバーから他の追跡班の声がした。

「カズヒコ、言われた通り南門に来たが、アキラが見当たらない。お前はどこにいる？」

「南門……だと？」

カズヒコには彼らの言っている言葉の意味が分からなかった。確かに、北門へ向かえと言ったはずだ。しかし彼らは南門にいるというのだ。

「なぜ？」

「通達ミスじゃないのか？」

アキラはまだ笑っている。

「そんなはずはない。……しかしアキラ、お前が追い詰められている事には変わりはない。残り時間3分……お前に救出する時間はない」

「……カズヒコ」

「なんだ？」

「その時計、ちゃんと合っているか？」

カズヒコはもう一度時計に目をやる。

「生憎だが、オレの時計は狂い知らずの電波時計だね。合っていないはずがない」

アキラはもう一度大きく笑ってみせ、カズヒコを指差した。

「オレはよく狂う電波時計を知ってるぜ？」

勝敗

その時カズヒコは、ようやく腕時計の異変に気がついた。

「時間が5分戻ってる？ …… どういうことだ？」

再び扉に目をやると、アキラはすでにそこにはいなかった。

「しまった！」

カズヒコは指笛を響かせた。その音は学校中に響き渡る。当然、牢屋へ救出に向かっていたアキラにもその音は聞こえていた。

「指笛？ なんのつもりだ……」

アキラは不審に思う。しかしこれが警察側最後の策、全員を牢屋へと召集するカズヒコ最終手段だ。それはこのゲームが始まる前、作戦会議で話した電波障害に備えたものだった。

カズヒコも遅れて牢屋へと戻ろうとするが、その途中、意外な人物を目撃する。

「カズヒコ、今の指笛って牢屋へ戻れの合図だよな？」

そこにいたのは牢屋の見張り役だった。

「なぜ持ち場を離れている？」

「なぜって、さっきオレに北門へ来るように言っただろ？ トランシーバーで」

なにかがおかしい。アキラを追うようになってトランシーバーの調子が悪い。しかし今は牢屋に戻る事が先決だ。カズヒコは牢屋へと急いだ。

一方、アキラは牢屋が見える所までできていた。当然見張り役は誰もおらず救出には絶好のチャンスだ。しかし時間が無いのも事実、迷ってなどいられなかった。牢屋まで急いで駆け出すアキラの間、反対からカズヒコの指笛で召集された追跡班がアキラに気づき、猛スピードで駆け寄ってきた。その距離五分と五分。互いに足は速い方だ。

間もなくゲーム終了の鐘が鳴る。勝負の結果は捕まった泥棒7人のうち4人をアキラが救出し、捕まえた数3人、逃げ切れた数5人でアキラチームの勝ちである。ゲーム経験の差が結果として出てしまった。

「オレの勝ちだな……」アキラはカズヒコの横に立ち肩をポンと叩く。「でもまあ、初めてにしてはよくやった方だ」

カズヒコは考え込むように、手に持っていたトランシーバーを凝視していた。学級委員の合図で皆が教室へ戻りはじめると、アキラも再びヘッドホンを耳に当て教室へと戻ろうとする。その時、カズヒコがトランシーバー越しに小声でつぶやいた。

「……おいアキラ」

「ん？」

電波ジャックをしたまま、ヘッドフォン通してその声を聞いたアキラは、まるで耳元で囁かれたかのような錯覚を起こし、思わず振り向いてしまった。しかし意外にもカズヒコは十数メートル離れた後方にいる。

『しまった』と思うアキラ。普通ならこの距離から小声でつぶやかれても誰も聞こえるはずがない。ましてやアキラはヘッドフォンをしていたのだから尚更だ。考えられる事は、『ヘッドフォンから聞こえる声』である。カズヒコはアキラのその反応にニヤリと口を歪ませた。

『まさか……もう電波ジャックの可能性に気づいたとでも言うのか！？』アキラが思う。しかしそれ以降、カズヒコはその能力について深く詮索してこなかった。

やがてアキラとカズヒコはお互いにライバルと意識し合うようになる。テストの点数や学校の給食早食い競争、バレンタインに貰うチョコレートの数など互いに張り合っているうちに、学業においてはアキラがカズヒコに引つ張られるカタチで成績を上げていき、現

在同一高校に通う事になった。

そしてさらに一年の歳月が経った今、アキラはこの喫茶店でマキとサトミを前に当時の事を話している。

「考えてみたらアイツのおかげなんだな……今の高校合格したの」

「それならもつと感謝してくれてもいいんだがな」

アキラが振り向くと、いつから話を聞いていたのかそこにはカズヒコが立っていた。

「遅れてすみません。あ、アキラ鞆そつち置けるか？」

カズヒコはアキラに鞆を渡し、その隣に座るやいなやメニュー表を眺め始めた。

「それで……探偵さん、早速で悪いんだけど教えてもらえるかしら？ 今日ここへ呼び出した理由」

サトミは机の上に身を乗り出し、少し声を張り上げて言った。気のせいか後ろを気にしているようにも見える。

「……そうですね、では早速本題に移りましょう」

そう言うとカズヒコはメニュー表を閉じ口を開いた。

「これから私が話すことは、ここにいるあなた方に一つの共通点がある事、それを前提としてお話しします」

アキラは中学の頃からカズヒコを知っている。しかし今までにこれほど真面目な顔をした所は見たことはなかった。続けて口を開くカズヒコ。

「私はある裏組織を追っています。その組織の名はASP、『アナザセンスプロジェクト』」

「アナザセンス……プロジェクト？」

サトミが問い返す。

「はい。アナザセンス、それはつまり『その他の感覚』第六感の事を言います。世間一般でよく知られているのは予感、靈感など。…そしてさらに常識では考えられないような人知を超えたものがあると私は見えています」

「予感に靈感？ そんなものが本当にあるとでも？ ふっ…バカバカしい」

サトミはその顔を隠すように紅茶に口をつけた。

「サトミさん……演技が下手ですね」

カズヒコのその言葉にムツとするサトミの様子がうかがえる。

「重要なのはここからです。ASPとはつまり、その能力、感覚を持つ者を付け狙う非合法な裏組織です。最近ではASの研究のため、常人に対し後天的にその能力を持たせる実験をしているという噂も耳にします。特に彼らには十分注意してください」

「その言い方だと、私たちがまるで能力を持っているみたいじゃない」

「だから最初に言ったじゃないですか……一つの共通点、それを前提に話すと」

サトミは最後までシラを切るつもりでいたが、カズヒコがここま

で知っているとなると嘘を吐き通すのに無理があった。ましてや話はいっこうに進まない。マキとアキラは二人の会話の様子を黙って見ていた。

「いいわ。その前提をもとに話を進めることにして……私たちにどうしろと？」

「ASPの捜査協力をお願いします」

サトミは少し考えるようにして口を開く。

「いいでしょう、協力します。ただし条件として私たちの協力もしてもらいます」

「ちよつとサトミ！……本気？」

マキが問う。

サトミには一つの悩みがあった。それはここ数日間の予知夢の増加と、それに伴なう事故事件の多発。サトミとマキの二人だけではとても捌ききれなくなっていた。このタイミングでアキラやカズヒコが現れ、協力してもらえるのであれば心強い。

「もちろん協力します。それに……全く関係がない事だとは思えませんしね」

カズヒコはアキラに鞆を取るように言うと、中から小汚い名刺入れを取り出した。

「これ、私の探偵事務所です」

マキとサトミに名刺を渡す。

「へえ……事務所も構えてるんだ」

「なにかあったら、ここにきてください。この場所を私達の拠点とします」

長らく話すこと数時間。その場は解散する事になった。その別れ際、カズヒコは言った。

「最後にマキさん……八年前の事件の事、思い出しておいて下さい」
その瞬間、マキの顔色が悪くなったのをアキラもサトミも見逃さなかった。

里見と真姫

皆が喫茶店を解散してから数分後、サトミは一人その場所に戻ってきた。その様子を店内から観察していた小柄な女性がまた一人店を出る。

「それで、どんな感じだった？」

サトミは彼女に訊ねた。

「白羽先輩、あれじゃダメですよ。もっとこう……こちらから聴かないと」

この小柄な女性の名は クラハラミナギ 蔵原美袋。小学生の頃からサトミの後輩で、この春よりサトミと同じ高校へ通うことになった。彼女もまた アナサゼンス ASの持ち主である。ミナギには人間なら誰しもが持っている良心と悪心のやりとりが見える。その狭間で揺れ動く心理、本音を見抜くことができるのだ。サトミはミナギのその能力を生かしてアキラヤカズヒコを試そうと、後ろで会話を見てほしいと頼んでいたのだが……。

サトミとミナギは家へ帰りながら話しをしていた。

「あれではよくわかりませんね。あのカズヒコとかいう探偵も上手く言葉を選んでいたような感じでしたし……ただ」

「ただ？」

「雛菊先輩は……何かを隠しています」

ミナギのその言葉にサトミは足を止めた。別れ際のカズヒコの言葉に、マキの表情が変わったのは間違いない。

「マキは……マキなら信用できる」

ミナギも足を止め振り向いた。

「白羽先輩と雛菊先輩って中学も高校も違いますよね？ なのになぜ……」

「私とマキは」

サトミとマキの出会い。それは彼女達が中学三年生の夏だった。
白羽サトミ、当時十四歳。

「それでサトミさん、あなたたち生徒会の皆にも応援を頼みたいんだけど」

「わかりました。そういう事でしたら……」

サトミは職員室に呼び出され、担任の先生から明日開催される剣道部の夏季大会への応援を頼まれていた。三年生は最後の大会となる夏季大会。サトミの中学校で開催される上、クラスの友達が出場することもあり一度は見てみたいと思っていた。

「さすがクラス委員、兼生徒会長ね！ ついでに他校選手や外来者の案内もよろしくね！」

「げっ……」

半ば無理やりではあったが、サトミは断ることをしなかった。担任もサトミが断るような人間ではない事を承知した上での頼みである。

大会当日早朝。サトミは夏用のセーラー服を身にまとい、案内板を持って大会案内をしていた。早朝にもかかわらず外は蒸し暑い。セミの声が五月蠅くこの暑さに拍車をかけている。

「剣道夏季大会の駐車場はこちらです！」

一台の軽自動車がサトミの前に止まった。

「お、ちゃんとやってるね」

先生が車のウィンドウを開ける。

「当然です。先生はあっちの駐車場使ってくださいよ。こっちは来客用です」

「あ、そうだった」

「しっかりしてくださいよ」

「……あとこれ、差し入れね」

そう言って袋の中からサトミに手渡されたのは、ペットボトル入りのよく冷えたミルクティーだった。

「ありがとうございます。ちょうど喉が渴いてた所なんですよ」

「十時までだから、もう少しがんばってね」

担任の先生はそう言うのと奥の駐車場へと車を走らせた。サトミは案内板を壁に立て掛け、乾ききった喉に潤いを与える。その至福の時を、じつと眺めてくる者の気配をサトミは感じ取った。そこにいたのは、剣道防具を一式抱えた他校の少女。どこからか走ってきたのか、息を切らし汗だくになっている。サトミはその少女の姿に、初めは呆気にとられていたが見た所かなりの美人であることから、いつしかそれは見惚れへと変わっていた。汗で濡れた黒髪が今度はその美しさに拍車をかけている。

「はあはあ……それ！ それ少し頂けませんか？」

少女はサトミが飲んでいるミルクティーを指差した。

「えっと、これ……ですか？ で、でも飲みかけだけど……」

「大丈夫です！」

少女はサトミからミルクティーを手渡されると、それを飲み始める。その姿の絵になることといいサトミは女でありながらもその少女の姿に頬を赤くした。少女はミルクティーを一滴残らず飲み干すとその直後、全部飲み干してしまった事に気がつき赤面する。

「あつ！ ……ゴメンなさい」

「いえ、いいんです。えっと……選手の方ですか？」

「はい、会場はこちらですよね？」

サトミと少女がそんなやり取りをしていると、試合会場となる体育館の方から声がする。

「マキ！ こっちこっち」

その声の主へと手を振り返す少女。

「連れの者がいました」

「よかったです。試合、がんばってくださいね」

サトミのその言葉に、少女はクスクス笑った。

「応援してくれるの？」

「確かに、敵の応援っていうのも変な話よね」

そんな会話を続けていると、今度は奥の駐車場の方からサトミの担任が呼ぶ声がする。

「サトミさん、ちょっとこれ運ぶの手伝ってくれる？ 案内はもういいから」

「はい！……うちの担任の先生です。人使い荒いんですよ」
そう言いながら、サトミは荷物をまとめ始めた。

「ではまた」

サトミがその場を後にする。

「サトミちゃんね……すっかりしてる」。マキは一人つぶやいた。

既視感（デジャヴウ）

サトミは先生に言われた通り、職員室へと荷物を運び込む。クラスの友人が試合するのは午後からだ。それまでの間は休憩の時間となる。

「先生、午前中の仕事はこれで終わりですよね？」

「ご苦労様。あとこれ、生徒会の皆の分ね」

先生はダンボールに入った人数分の弁当を手渡す。サトミはそれを抱えて生徒会室へと足を運んだ。部屋にはまだ誰も来ていない。ダンボールを開くと中にはお弁当と一緒に今日の大会のパンフレットが入っていた。一通り目を通してしていると、扉が開く音がする。

「こんにちは白羽先輩、早いですね」

サトミの後輩にあたる副会長のヒロアキである。

「いや、貴方が遅いんですよ。もう昼だから」

サトミはあきれたように言った。

「そうそうヒロアキ君、ちょっと席を外したいんだけど、留守番頼んでいいかな？ 鍵はここに置いとくから」

「はい、いいですけど」

「よろしくね」

サトミは部屋を出ると、大会視察のため体育館へ向かっていた。剣道防具を抱えた数人の選手とすれ違いながら、グラウンドに目を向ける。外には昼食にお弁当を食べているチーム、次の試合のためにウォーミングアップをしているチームもいた。

サトミは偶然にもその中に一人「雛菊」という垂ネームを目にする。

「あつ……あの子は今朝の……雛菊さん？ かな」

しばらく眺めていること数分。サトミは雛菊の背後から大柄な男が一人、歩み寄るのを目撃した。男は竹刀袋を片手に持ち、明

らかに不審な動きをしている。サトミがその男の接近に嫌な予感があったのは言うまでもない。その原因としても一つ、雛菊がその男の接近に気がついていなかったからだ。

そしてそれは『刹那』だった。サトミの目の前で赤い血しぶきが舞う。男が竹刀袋から取り出したのは、既に刀身がむき出しの日本刀。その剣が雛菊真姫の背中から腹部までを貫いていた。

「い……いやー……っ!!」

サトミは自分の悲鳴で目を覚ました。全身には浴びるほどの冷や汗をかいている。その出来事が『夢』だった事に気づき、安堵するのに十数秒。そして再度不安感に襲われる。この夢、サトミの見る夢は予知夢だ。すなわち、今から十二時間後にこの事件が現実起こるといふ事になる。サトミは冷静に現在の時間と夢の内容を手帳にメモした。現時刻、深夜一時二十五分……。

その日眠れぬまま朝を迎えた。まるで二日連続同じ事をしているようで気が休まる暇がない。夢の朝と同じ朝。サトミは案内板を持っていった。

「剣道夏季大会の駐車場はこちらです」

サトミの予知夢にはルールがある。それは現実世界での事件、事故が起こるギリギリまでは、予知夢の通りに動くこと。それを破ると予知時刻に大きなズレを生じさせることになりかねない。夢と違うのはサトミの精神面くらいだろう。サトミは懐中時計に目を向ける。『そろそろ先生が来るころか……』

「お、ちゃんとやってるね」
時間通りだ。

軽自動車から先生が顔を覗かせた。ここまでは当然、夢と同じだ。ギリギリまでこの軸をブレさせなければよい。サトミはミルクティを受け取り先生を別の駐車場へ見送った。

一方、マキは防具を担いで試合会場へ走っていた。

「はあはあ……大会当日に……目覚まし時計の電池切れなんて……、ありえないでしょ。おまけに皆先に車で رفتっちゃうし」

息を切らしながらも、会場へと向かうマキ。甘倉街道駅から約2 Kmもの距離を、防具を担いで十数分走り続けていた。あの角を曲がれば入り口が見えてくる。そしてやがて眼前に現れる少女。会場案内だろうか、案内板を壁に立て掛け、ペットボトルに付いた水滴の肌理細やかさから窺えるほど、キンキンに冷えたミルクティーをおいしそうに飲んでいる。唾を飲むマキ。じっと眺める。やがて少女はマキの存在に気が付いた。

「はあはあ……それ！ それ少し頂けませんか？」

思わず口をついて出た。マキはペットボトル入りのミルクティーを指差す。

「えっと、これですか？ でも飲みかけだけど……」

「大丈夫です！」

会場案内の少女は手に持ったミルクティーをマキに手渡した。早朝にもかかわらず、30度を上回る猛暑日。そこからさらに、防具を担いで約2 Kmもの距離を走ってきたマキの体は、すでに乾ききっていた。一口貰うつもりが、そのすべてを飲み干してしまう。

「あつ！ ……ゴメンなさい」

「いえ、いいんです。えっと……選手の方ですよ？」

「はい、会場はこちらですか？」

マキと少女がそんなやり取りをしていると、試合会場となる体育館のほうからマキを呼ぶ声がした。声の主へと手を振り返す。

「連れの者がいました」

「えっと……よかったです。試合、がんばってくださいね」

少女のその言葉にマキが微笑む。

「応援してくれるの？」

「確かに、敵の応援っていうのも変ですよ」

続けて奥の駐車場から少女を呼ぶ声。

「サトミさん、ちょっとこれ運ぶの手伝ってくれる？ 案内はもういいから」

「はい！……うちの担任の先生です。人使い荒いんですよ」
荷物をまとめるサトミ。彼女たちはその場で別れの挨拶を交わした。

「サトミちゃんね……しっかりしてる　ん？」

失態

案内の仕事を終えたサトミは先生の車からダンボールを抱え、職員室へと向かっていた。

「そういえばサトミさん、お友達の笹熊さんの試合はいつ？」

「ああ、スズエの試合ですか？午後からの個人戦だと聞いてますけど」

ササグマスズエ

笹熊鈴江。彼女はサトミのクラスの友人で、甘倉中学校女子剣道部主将。この地区ではツキノワグマの名で知られる優勝候補の一人として挙がる人物である。小学生の頃から父親の指導の下、剣道を続け、中学二年でありながらスズエの優勝は揺ぎ無いものだと思われる。しかし去年、突如現れた桜夜中二年の雛菊に優勝の座を奪われ、今年中学最後の引退試合となる夏季大会に向けて猛特訓をしていた。

「スズエ、この大会を目標にいつも遅くまでがんばってましたよ」

「確か去年、惜しくも優勝を逃したのよね……桜夜中の雛菊だった？」

「今年こそ彼女に勝つために」

「……？ 桜夜中の雛菊？ 雛菊雛菊……ヒナギク！？」

夢で殺された少女の名と同じだ。そして彼女は今朝の少女と同一人物である。雛菊真姫に勝つ事こそが笹熊鈴江の目標だった。夢の中では意識していなかった会話の一つ一つが現実では気にかかる。

「そういえばスズエが言っていました。桜夜中の雛菊だけには負けられないと」

「今年こそ優勝できるわよ、彼女なら」

「……」

「どうかしたの？」

「いえ……なんでもありません」

サトミは夢の出来事と現実である今とを照らし合わせていた。本来知り得ないはずの未来を今は知っている事。その精神状態で夢の

通りに動く事はそう容易いものではない。しばらく歩くと、職員室の前までたどり着いた。先生は足を器用に使つてドアを開くと、荷物を席の後ろへ置く。サトミの午前中の仕事はこれで終わりだ。午後からは笹熊スズエの応援の予定だが、しかしその前にサトミにはやらなければならぬ事がある。それは言うまでもなく予知夢の事件阻止。より具体的に言うならば、『不審者による雛菊真姫の殺害を阻止する事』である。

『確か、事件時刻は一時二十五分だったかな？』 サトミは鞆の中に手を入れ、予知夢の内容を書き記した手帳を探りだし、しかし。

『あれ！？ ない！……手帳がない！！』

焦りを見せるサトミ。予知の内容を記した手帳が見あたらぬ。いくら探しても鞆の中にないのだ。

『家に忘れた？ でも確かに鞆に入れたはず。どこかで落とした？ でもどこで……』

サトミにとって手帳を落とすという事は、予知の詳細が分からないのも問題ではあるが、それだけではない。仮に誰かがサトミの手帳を拾い、中を覗いたりしたものであれば過去数十件の事件、事故を阻止してきた予知夢の内容が世間に知れ渡る事になりかねない。そして今回の事件の時間軸に大きなズレを生じさせる事にもなる最悪のケースだ。

『くっ……さすがに予知手帳を失くす未来までは予知できなかった。そもそも予知夢ではこの手帳自体が存在しえない』

サトミは朝起きてから今までの行動の全てを思い返すことにした。朝寝不足のまま目覚ましに起こされ、枕元にある手帳をそのまま鞆に入れた所までは、仮に寝ぼけていたとしても覚えている。その後自転車のカゴに鞆を入れ、そのまま学校の駐輪場へと向かった。そこから朝の大会案内。そしてマキと出会い

サトミは思い出した。今朝、案内の時に先生からミルクティーを買った後、一度手帳を開いた事を。

「そうだ、あの時に置き忘れたかもしれない……」

サトミは今朝の大会案内場所へと戻るがしかし　ここにもない。
『どこに落としたのよ私！』

頭を抱え途方に暮れるサトミ。懐中時計で現時刻を確認しようとしたが、それさえも手帳と一緒に失くしたことに初めて気づく。寝不足が招いた結果だ。やがて頭がボーッとしてくると、サトミは崩れるようにその場へと倒れ込んだ。

「……目を覚ましましたか？　白羽先輩、門の前で倒れてたのを僕が保健室まで運んだんですよ」

サトミが目を覚ましたあその時、目の前には副会長のヒロアキがいた。

「……私」

「働きすぎです。断る事も覚えたらどうですか？」

サトミは朦朧とする頭を抑えると、ベッドから体を起こし、やがて事件予知の事を思い出した。

「ヒロアキ君！　私どれくらい寝てた！？」

「えつとここについてからまだ……一時間くらいですよ。今一時二十分です」

『残り五分！』

サトミは保健室から飛び出した。予知夢の通りなら、あと五分以内で雛菊マキは不審者の手によって殺害される。そしてその未来を阻止できるのは、未来を知っているサトミだけだ。この時ばかりは自分の愚かさを祟った。教室の前の廊下を駆け抜け、そこからあの場所へと息が切れるほどに走る。

『間に合って！！』

グラウンドへと繋がる階段を駆け下りる途中、サトミは足を踏みはずし転落した。右足を痛めながらも体を起こし、その視線の先にマキの姿をとらえる。その姿はまるで夢と同じで、これから起こる

事件、予知夢のあのシーンを連想させた。転落した時の痛みか、または不安によるものなのか、サトミの視界は涙でぼやけていた。

「マキさん！」

しかしその声は届かない。まもなくマキの背後へと現れる不審者。あの時の男だ。

『もう……間に合わない』

ついにサトミは間に合わなかった。

手帳

そう 間に合ったのは雛菊真姫、本人だった。

「あら……私に刃を向けるとは、いったいどんな見かしら？」

不審者の男が突き立てた刀の切っ先を、マキはギリギリの所を竹刀一本で去したのだ。すかさず反撃に移る。その一撃を頭に受け不審者の男は倒れた。当然、サトミは目の前で起こった出来事を理解できずにいた。今までにサトミが手をかけることなく、未来が変わることなどなかったのだから。いったいどの時点で未来が変わったというのだろうか。しかし今のサトミにとってはもうどうでもいい事だった。

「……よかった」。張り詰めていた緊張感が切れると同時に、サトミは再びその場に倒れこむ。

ここは室内で目の前には天井、周囲にはかつて見覚えがある白い光景が広がっている。いつだったか、夢か現か、ついさっきこの場所にいた気がする。それはサトミの心理。この場所はさっきの保健室だ。また夢を見ていたのだろうかとサトミは思った。

「目を覚ましたようね」

声のする方へ視線を向けると、そこには雛菊マキの姿があった。

その身なりは剣道着を着たままの姿で、カーテンの間からわずかにこぼれる西日が、彼女を照らしている。読書をしていたのか、本を閉じサトミの方へと視線を変えた。

「あなたは今朝の……」

「ええ、それよりも大丈夫？ 急に倒れるんだもん、びっくりしちやった」

サトミは時計に目を向けた。予知夢の事件時刻は優に超えている。「少し寝不足が続いて……さっきの男は？」

「気絶したところをお巡りさんが取り押さえた。銃刀法違反及び殺

人未遂だつてさ」

二人の会話に気がついたのか、ベッドを仕切るカーテンの向こうから保健の先生の声がする。

「雛菊さん、白羽さんは目を覚ましたか？」

「はい」

保健の先生がカーテンを開く。

「サトミさん、ちゃんと雛菊さんにお礼を言つて。この子が保健室まで運んできてくれたのよ。それにずっと貴方についていてくれたんだから」

「ずっと？ 試合には出なかつたの？」と、サトミはマキに問う。

「ええ、でもいいのよ。それに白羽さんには大きな借りがあるしね」マキのその言葉に、サトミは今朝のミルクティーを思い出す。

「あんなモノあげただけで借りだなんて、大切な試合まで棄権してまで……」

「あんなモノ？ ……何か勘違いしてるみたいだけど、私の言う借りはこれ」

そう言うつとマキは保健の先生が自分の仕事に戻るのを確認した上で、さつきまで読んでいた本をサトミに差し出した。そしてそれは本ではなく手帳だった。サトミが無くした手帳、予知夢を書き記してきた手帳は、マキの手からサトミへと返された。

「これは……私の手帳」

「ゴメンなさい。今朝あなたが置き忘れたのをそのまま……」

「それでは中を？」

「ええ」

そしてサトミはようやく理解することができた。彼女、雛菊マキ本人が、事件を未然に防ぐ事ができた理由を。続けてマキは口を開く。

「試合には結局出られない未来だった……そうでしょ？ だからあなたは何も悪くないの。むしろ私はあなたに救われた」

サトミは、不思議に思っていた。なぜこんな能力をすんなりと信

じ、また受け入れられるのかと。そして聴かずにはいらなかった。

「私の力……信じているの？」

「もちろん。だって私は」

この夏より彼女たちは、その運命を共にすることになる。

そして時は移り変わり現在。当時の事を思い出しながらサトミはベッドの上に寝転がり、カズヒコの名刺を見ていた。カズヒコがマキに放った最後の一言が気にかかる。そしてその帰り道、ミナギはマキが何かを隠しているとも言いつつた。

「マキ……八年前にいったい何があったって言うの？」

サトミとマキが出会ってからの約二年間、彼女達はお互いを唯一の良き理解者として生きてきた。マキの事なら何でも知っているつもりだった。サトミはベッドから起き上がると、机の上にある携帯電話に手をかける。しかし、マキの番号を前にプッシュボタンを押す手が止まった。電話を掛けた所でいったい何を話せばいいのか、その時のサトミにはわからなかった。再び名詞に目を向ける。

「小野村探偵事務所……明日学校の帰りに行ってみるかな」

喫茶店2F

翌日。アキラは学校へ向かう途中、異様なまでに周囲の視線を感じずにはいられなかった。昨日のカズヒコの発言を意識しすぎてか、周りの人間が皆敵に見えているとでもいうのだろうか。しかし気づいてみれば、それは男どもの視線に限定されていた。アキラが門へ入ろうとする逆の通学路から偶然にも雛菊マキが現れ、一時沈黙。先に口を開いたのはマキの方だった。

「お……はようございます。宮嶋くん」

マキの丁寧な挨拶に意表をつかれるも、遅れて返事をする。

「あ、おはよう」

挨拶をするアキラを横目に、マキは下駄箱へと向かう。アキラも仕方なくマキの後についていくが、その途中、再びマキが口を開いた。

「ねえ宮嶋くん、さっきから思ってたんだけど、周りの視線がやけに痛くない？」

マキは辺りを見渡ししながら、小声でアキラに語りかけるように言う。

「ああ、オレもそう思ってたんだよ。特に男どもの、なんかこう……突き刺さるような視線？」

「そう？ 私は女子生徒たちの噂する声が聞こえてくるような視線かな」

「……なんでだ？ オレ達、なんかおかしいのかな？」

アキラとマキは下駄箱で上履きに履き替え、教室へと向かう。周りの視線は教室に入っても絶えることがない。そんな視線に違和感を感じながらも、アキラは自分の席に向かい、鞆を机の横にかける。同時に一人の男がアキラの肩に手をかけ、教室の後ろまで引っ張った。

「雛菊と一緒に登校とはいいご身分だなアキラ」

「……なんだ、シユウか」

「ってことはOKもらったのか？」

「なにが？」

「トボケなさんな。昨日雛菊に告白して、翌日に仲良く登校とあっちゃ、みんな気になるに決まってるだろ」

シユウのその言葉でアキラはようやく思い出した。昨日からどういふ訳か、アキラが雛菊真姫に告白をしたというデマが流れている。その噂こそが今朝の刺さるような視線の理由だった。男どもの嫉妬に満ちた視線。

『ああ、そうだった……昨日その事を問い詰めようと、喫茶店に走ったんだった』。アキラは昨日の事を思いだし、「いや、あれは誤解だよ」と言う。アキラのその言葉に間髪入れずにシユウが口を挟んだ。

「だよなー！ じゃあ付き合っていないんだな？ フラれたんだな？」

「そうなんだな？」

「いやフラれたとかそんなんじゃない……」

「今度、残念パーティー開いてやるからさ」

「いやだから……もういいよ、それで」

アキラはシユウの嬉しそうな姿を見てため息をついた。

その日の放課後、掃除当番だったアキラは教室を掃除していた。

ゴミを掃くアキラの前にチリ取りが置かれると、同時に女性の声が聞こえる。

「ねえ、どういふこと？」

『……雛菊マキ』

アキラは彼女の言葉にキョトンとしている。マキは制服の胸ポケットから振り返った一枚の紙切れを取り出すと、アキラの前へと差し出した。その紙切れには明朝体でこう書かれている。『小野村和彦』と。あの名刺だった。

「あ、はじめまして小野村和彦さん。探偵でしたか」

「ふざけないで。そうじゃなくてその下の住所、わかる？」

アキラとカズヒコは中学二年の頃からの付き合いだが、その素性はあまり知らない。探偵事務所というのは初耳だし、カズヒコが言っていたASPの話も喫茶店で聞いたのがはじめてのことだった。アキラは名刺の下の方に書かれている住所に目を向ける。

「この住所どこかで……」

「私も気になって調べてみたんだけど、この場所って……あ、そう
だ」

マキはそういうと鞆の中から財布を取り出し、その中から別の紙切れを取り出した。

「例の喫茶店『交茶』^{「コウサ」}。見てみてこの住所、ほとんど一緒」

「違うのは最後の……2Fか」

「つまり、小野村探偵事務所は、喫茶店『交茶』の二階ってこと？」

アキラとマキは喫茶店の前で立ち尽くし、二階の窓を見上げていた。

来客

小野村カズヒコは暇を持て余していた。窓際に置いたオフィスチェアにうなだれてはブラインドから何度も外の様子を見下ろしている。目の前を通る国道3号線では、電気工事が行われており騒音が耳にさわる。机の上には一台のデスクトップパソコンと幾つもの本が高く積み重なり今にも崩れ落ちそうだが、絶妙なバランスを保っていた。

「そろそろ来てもいい頃なのだが」

カズヒコが待っているのは、先日ASについて話したメンバー、すなわちアキラ、マキ、サトミである。カズヒコは学校が終わると同時に、この事務所に来ていた。しかしこの場所に来てからすでに三十分が経とうとしている。

『誘導があまかったか？』

再び積み重なる書物に手を伸ばそうとした時、ブザーがなった。待つてましたと言わんばかりに、机の上に投げ出していた両足を床に戻しオフィスチェアの肘掛に両手を置き立ち上がる。ギシギシと安定しない机が揺れ、積み上げていた本が崩れ落ちた。『しまった』と思い拾い上げる素振りを見せるが、ドアの前に待たせている来客の方を優先することにした。ドアノブを回し扉を開くと、薄暗い通路に立っていたのは見たことがない一人の女性。

「『探偵事務所』と聞いてやってきました」

ベージュのコートに身を包み、パーカーを被ったその女は体格が良く、女性にしては身長も高い方だ。年の頃は十七か十八といったところだろうか。その左手に長い棒のような物が入っている袋を抱きかかえている。部活かサークルの帰りなのだろうとカズヒコは思った。しかしながら、カズヒコにとっては意外な来客だ。事務所を構えているとはいえ、喫茶店の二階にひっそりと構えられたこの場所に一般来客とは珍しい。

「どこでこの事務所のことを？」

「はい、ネット上で人探しならここが一番いいというクチコミがありまして」

しかしカズヒコ自身、事務所に関することは公表していない。過去に数人の依頼を受持ったが、そのことが書き込まれたのかもしれない。

「ではこちらへ。靴はここで脱いであがってください」。カズヒコはその女を招き入れた。

「失礼します」

女は靴を脱ぐと、空いているほうの手で靴を揃えた。礼儀ただし。薄暗い玄関だがその靴を見てカズヒコは思った。

「失礼ですが、きみはもしかして高校生？」

「はい」

そう言うとその女はコートを脱ぎだした。私立高校の制服に身を包んだ彼女は脱いだコートを右腕に掛け、カズヒコに差し出された来客用のスリッパへと履き替える。

「そちらのソファァー、使ってください」

床の上に散らばった本を、数冊拾い上げると、何の迷いもなく本を元の棚へと戻していくカズヒコ。その本の背表紙には『人の持つ感覚』や『第六感』、『Another sense』というタイトルのある物がある。棚にはまだいくつもの本が並んでいた。その中に年度別にファイリングしたと思われる新聞の切り抜きが、びっしりとききつめられている。それはカズヒコが生まれる1987年よりもまだ前のものまであった。

「それで、誰か人を探していらっしゃるんですか？」

彼女を背に本の整理をしながら問いかけるカズヒコ。その問いに対し、女性は語りはじめた。

「昔の友達を探しています。彼女とは中学は違ってたけれど、とても仲良しでした。お互いにいろんなことを競い合って……でも彼女はいつも私より一枚上手で……そんな彼女に負けたくないという思い

が私を成長させてくれたんです。いつしか彼女に尊敬の念までいでいていました」

「あなたにとつてはかけがえのない人なんですね？」

「……でもある日、私はその全てを失った」

その瞬間、女の表情が一瞬こわばったかのように思えた。

「父を失い、母は自殺、一人娘の私は行き場を失った。……孤独だった。それでも今日まで生きられたのは彼女に対する執念」

これが親友にいだく感情だろうか、カズヒコは手に汗を握った。会わせてはいけない。決して彼女とその友人を会わせてはいけない。探偵としてあるまじき事だが、直感でそう思った。カズヒコは目の前女性に対して、恐怖心さえ覚えていた。それを悟られぬように、背をむけたまま話を続ける。

「それは大変でしたね……それで、その友人の名前は？」

「雛菊……真姫」

カズヒコの頬を一筋の汗が流れ、緊張がはしった。

「……わかりました。しかし、今日の所はお引き取りください。次のクライアントが来ますので。次回からは予約を取ってください。これが私の携帯です」。カズヒコは自分でも焦っていることがわかった。しかし女は席を立とうとしない。

「本当に探していただけのんですか？」

「もちろんです」

「私の名前も聞かないうちには？」

いつも冷静なカズヒコが、この時ばかりは動揺していた。クライアントの名前を聞かずに帰す探偵事務所がどこにあるだろうか。

「そうですね……あなたのお名前は？」

「……私の名前は」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949q/>

Another sense(アナザセンス)

2011年10月6日03時30分発行